



人間の中の動物

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

人間は生物学的に一般にヒトと表現する。あくまでも客観的にとらえようとする響きだ。

人間という表現には生物学の世界とは違い物の存在だけではなく、深く、広く、複雑で、簡単には割り切れない感覚が加わり、哲学的な響きさえ感じるようになる。どこか生きる本質まで問われる存在にかわる。

人間とはヒトとヒトの間にある「大事なものを身につけたものを言うのか。「大事なものが何であるか、忙しすぎる今の人間は面倒なことを考えなくなりつつある。

難しく、奥深い人間だが、動物として眺めてみると面白いことに気づくこともある。

ヒトの進化を体系的に辿ってみると絶妙な偶然と必然の歴史が見えてくるようだ。ヒトを分類学で位置づけると、脊索動物門、脊椎動物亜門、哺乳綱、霊長(サル)目、真猿(しんえん)亜目、ヒト上科、ヒト科、ホモ属、サピエンス種と教科書的には書いてある。属、種で記載するリンネの二名法でヒトの学名はホモ・サピエンスだ。ヒトのからだのどこかには背骨をつくり、先祖のサルのDNAが存在する。

原始のヒトは、ゴリラやチンパンジーなどを含むヒト上科に入っていた。その中からヒト科、ヒト属の仲間が分化し、そのうちの一種がサピエンス種(ヒト、人、人間)として生き残った。

現代人はホモ・サピエンスであるが、化石上

にも旧人のホモ・サピエンスがいる。ホモ・サピエンスには新人と旧人の2亜種が存在している。急速に変化する今の社会に暮らす現代人を見ながらバカなことを考えてみた。

新人である現代人は、自然と向き合い文明を発達させてきた。生活や経済の向上に懸命になり、さらなる追求の結果、コンピュータを開発し、人工知能の世界に置き換わる予感さえ漂ってきている。自然と向き合った世界から、人工知能の世界にシフトしはじめているようにも思えてくる。自然とかかわらない人工知能の世界だけで生きる新人は、やがて超新人の新亜種ホモ・サピエンスになっていくのか。

ところで、ヒトはサルから進化したと誰しも理解しているが、そう思わない人々もいる。キリスト教社会の一部では今でも宗教と科学の対立があるようで、人間の霊長類、サルからの進化を否定している。人は神の創造物であると信じているからだ。人はやはり特別な存在であり、動物のサルが先祖であるなどとんでもないと思うのだろう。米国では実際に進化論を教えない州が結構あるらしい。確かに、科学では説明できない存在に思えてくることがあるのは、分かる気もする。

閑話休題、兎に角、ヒトという動物、人間は他動物と比較し特異な存在である。道具や火を使い、言葉や文字で情報交換し、自然科学の次

元では説明できない超越した能力を持つ存在だ。

人間は動物から超越した存在であるのは事実だが、人間と動物の何気ないしぐさに、共通する何かがあるように思えることがよくある。動物に人間くささを感じたり、人間に動物性を発見したり、人間にはどこか先祖の動物たちのDNAが存在し生きてきたのだと勝手にうなずいている。

チンパンジーが透明な箱の中にある好物のピーナツを手に入れようと小さな穴から指し込んだ細い小枝で真剣なまなざしで引き寄せようとする様子は、人がUFOキャッチャーでケース内のぬいぐるみをゲットしようと眉間にしわを寄せ懸命になる姿にも似る。チンパンジーは眉間にしわを寄せることはないが、それなりの集中力を見せ、ピーナツをゲットした時、「ウォ、ウォ」と小声を出し満足そう。人は「やった」と歓喜の笑顔でキャーキャーと騒ぐ。よく似るといふより、同じに思えてくる。因みにチンパンジーとヒトのDNA塩基配列の98.7%が一致しているとされている。

子どもを抱く姿、母ザルと人間のお母さんは相似形である。手があるから手で子を抱くのは当たり前と言ってしまうまでもだが、実によく似る。子ザルに力がつくとき、母ザルはより移動の自由度をあげようと子ザルを背中に乗せる。子の成長と共に人間のお母さんが背中に負ぶって働く姿とそっくりだ。

最近の人間のお母さんの育児行動パターンが昔と比べ随分と変わってきているように思えてくる。よりスマートに機能的に前抱っこが主流となっているが、日本の子育てから「おんぶ」のスタイルが消えつつある。子育ての仕方も進化し、超新人類の子育て方式が登場しているの

かもしれない。くらしの変化、お母さんの子育てで労力の軽減など、子育てスタイルが変わってきて、子を抱かなくてもいい工夫や環境が整ったのだろう。古い人間からすると、親の背を見せる機会が減ってきているようで、どこか寂しさを感じなくもない。

さらに、サルイメージにはサル同士がノミを取るしぐさ、毛づくろいがある。「グルーミング」と言われるが、サルにとって大きく二つの意味がある。一つは体表に付着する寄生虫や汚れの除去、大事な体毛のケアである。

もう一つは、相互ケアで心を通い合わせ、仲間をつくり、信頼関係を築いているのだ。サルの社会づくりと維持には欠かせない重要な行動なのだ。言葉のないサル社会で不可欠なコミュニケーション手段である。人間社会になるとコミュニケーションとしてサルのような直接的なグルーミングは見られない。子育て時代に親子の濃厚なふれあい、ケアがそのなごりのようにも思えるが、悲しい時、うれしい時に互いが抱き合い、心を通わせる行動をするのは、人間に隠され残っているある種のグルーミングと言ってもいいのかもしれない。

人間は言葉で心伝え合うことができる動物だから直接的なグルーミングを省いてきた。しかし、幼児期、悲しみに打ちひしがれた時、高齢になり弱って行く時など、生きる上での大事な時になればなるほど、お互いのふれあいの中に心を通わすつながりを持ちたがる。言葉や便利な機械でのコミュニケーションは有効に活かしながらも、動物的な原始的なふれあいも捨て去っては動物性をなくしてしまいそうだ。人間は動物を下地に生きる存在でもある。